

## 2.学部の自己点検・評価

### A.神学部

#### (1)自己点検・評価

##### a.自己点検・評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

###### 現状の説明

学部の自己点検・評価を恒常的に行うための事実上の制度として、年1度、学生会と教授会とで共同で行っているカリキュラム懇談会、及び実践神学部門の兼任教員と専任教員とで構成している年1度の実践神学教育協議会があり活動している。

###### 点検・評価 長所と問題点 将来の改善・改革にむけての方策

学部内の制度としてよく機能している。ただし、自己点検・評価の項目を個別的に明確化したシステムにまでは至っていない。将来は、制度システム化する方向で考慮したい。

#### (2)自己点検・評価と改善・改革システムの連結

##### a.自己点検・評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善・改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

###### 現状の説明

自己点検・評価の結果を受けて、教授会が改善・改革を行っている。特に、10月、11月の教授会では、次年度の授業計画を検討するにあたり、このことを踏まえている。

###### 点検・評価 長所と問題点

教授会が改善・改革を行っているが、独自の制度システムにまで定着していないことが問題点として指摘されよう。

###### 将来の改善・改革に向けての方策

将来なお、教授会とは別に、この制度システムを設けるかについて検討していきたい。

#### (3)自己点検・評価に対する学外者による検証

##### a.自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性

###### 現状の説明

学外者による検証はまだ制度としてはないが、日本バプテスト連盟と共催で行っている神学教育協議会及び実践神学協議会は、この方向へ向けた試みともなっている。前者は、日本バプテスト連盟理事会選出の5名の委員と教授会とが、年1回集まり、カリキュラムや神学教育全般について意見を交換している。後者は、実践神学部門担当の非常勤講師と教授会とが、年1回、実践神学部門のカリキュラムや神学教育について意見を交換している。両協議会とも、意見の交換のみならず、神学部全体の教育研究活動に関する外部からの点検・評価として事実上機能している。

###### 点検・評価 長所と問題点

制度システムとしてはまだ成立していないが、現在ある神学教育協議会及び実践神学協議会を、充実したものにしていかねばならない。

###### 将来の改善・改革に向けての方策

現在ある神学教育協議会及び実践神学協議会を、将来、学外者による検証の制度としてシステム化する方向を探る必要がある。

#### (4) 評価結果の公表

##### a. 自己点検 評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明 点検 評価 長所と問題点 将来の改善 改革に向けての方策

本学全体として、公表は総括報告書を刊行して行っている。総括報告書の刊行は、評価すべきである。総括報告書が学内において広く読まれ、検討されて大学全体と各学部改善のために有効に用いられるべきである。

##### b. 外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明

本学の外部評価は、現在はまだ実施していない。

点検 評価 長所と問題点

自己点検 評価を更に効果的にするためにも、外部評価を制度的に実施し、その結果も外部に公表することを検討する必要がある。

将来の改善 改革に向けての方策

外部評価を学内においても積極的に受け止めるようなシステムを作る努力をすべきである。外部評価を実施する以上、その結果については最終的には学内外に公表すべきであろう。ただし、その場合においても当然のことながら、個人のプライバシーの保護、及び学問研究評価における客観性と公平性を確保することが不可欠であり十分に慎重な配慮が求められるであろう。

## B. 文学部

### B-1. 英文学科

#### (1) 自己点検 評価

##### a. 自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

現状の説明

英文学科としては、学科主任を中心とする点検 評価委員会において自己点検 評価を行っている。

点検 評価 長所と問題点 将来の改善 改革に向けての方策

学科主任が英文学科のすべての項目について点検することには量的にも質的にも限界があり、それぞれの項目毎に分担して点検 評価を行ったほうが望ましい。

#### (2) 自己点検 評価と改善 改革システムの連結

##### a. 自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

現状の説明 点検 評価 長所と問題点

自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための委員会等、特別の組織は編成していない。必要に応じて、学科主任が発案、立案して協議会で諮るようになっている。現状では、ほぼ適正に自己点検 評価が機能している。

将来の改善・改革に向けての方策

時代や社会のニーズを考慮しつつ、必要に応じて適宜改善の努力をする際、定期的に自己点検・評価を実施していることが重要である。

(3) 自己点検・評価に対する学外者による検証

a. 自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性

現状の説明

自己点検・評価したものを大学全体で整理統合して、評価基準協会に提出し検証をしてもらうことになっている。

点検・評価 長所と問題点

第3者の眼から客観的な評価が期待でき、また、自己点検では気付かない点を指摘される機会でもある。

将来の改善・改革に向けての方策

点検・評価の狙いと項目が、より論理的、効率的に整理されるべきである。点検・評価原稿の作成に、膨大な時間を割かなくて済むようなものを検討すべきである。

(4) 評価結果の公表

a. 自己点検・評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明

3年毎に総括報告書「西南学院大学 現状と課題」を公刊し、自己点検・評価結果を学内外に公表している。

点検・評価 長所と問題点

自己点検・評価結果が学内外に向けて発表されることには意味がある。ただし、その内容がこのように重複的で、膨大、複雑になると、逆に利用価値がなくなってしまう恐れがある。

将来の改善・改革に向けての方策

自己点検の形式・内容が一律的なものでなく、学部・学科・専攻に応じて、点検・評価の狙いと項目がより論理的、効率的に整理されるべきである。そうすれば、より実用的で参考にしやすいものを作成することができるようになる。

b. 外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明

外部評価の結果は、学内に向けて発表されてはいない。

点検・評価 長所と問題点

外部評価は客観的に改善を図るためにも有用であると考えられる。

将来の改善・改革に向けての方策

外部評価の結果を有効に活用できるような方策が考えられるべきである。

## B - 2 . 外国語学科英語専攻

### (1)自己点検 評価

#### a.自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

##### 現状の説明

英語専攻としては、西南学院大学点検 評価規程」に基づいて、課程主任を中心に数名の委員からなる点検・評価委員会において、自己点検 評価を行っている。結果は年次報告書の形でまとめられ、学部教授会の承認を得て学長に提出している。また、3年毎に行われる中期的な総括報告書の第2回目として、『西南学院大学 現状と課題』が1999年に発行されている。

##### 点検 評価 長所と問題点

制度としての点検・評価委員会は円滑に運営されており評価できるが、英語専攻が抱えるすべての項目について点検 評価が行われているか問題である。すなわち、課程主任の責任として処理し、検討している諸問題が、点検 評価委員会に十分反映されているか懸念される点もある。

##### 将来の改善 改革に向けての方策

課程主任が英語専攻のすべての項目について点検することには、量的にも質的にも限界があるので、それぞれの項目ごとに分担して点検 評価を行ったほうが望ましいと考えられる。

### (2)自己点検 評価と改善 改革システムの連結

#### a.自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

##### 現状の説明

本来は、点検 評価委員会の結果を踏まえて将来の発展に向けて改善を行うことが期待されているはずであるが、制度としての点検 評価委員会の運営が、つねに英語専攻の改善、発展のために活かされているとは言い難い面もある。多くの問題は、英語専攻の懇談会、学科協議会の議題として検討される場合が多い。

##### 点検 評価 長所と問題点

このような点検 評価の機会が改善のための有効なシステムであることはまちがいないが、英語専攻が抱えるすべての項目について点検 評価が行われているか問題である。英語専攻の改善 発展のためには、自己点検 評価の結果と教授会、協議会との機能面での統合を計る必要がある。

##### 将来の改善 改革に向けての方策

報告書の作成には膨大な時間と労力を必要とするので、各分野毎に委員で分担する等の工夫が望まれる。また、点検 評価された各項目についての改善策が、実行に移されるようなシステム作りを検討する必要がある。

### (3)自己点検 評価に対する学外者による検証

#### a.自己点検 評価結果の客観性 妥当性を確保するための措置の適切性

##### 現状の説明

現在は、英語専攻内部で自己点検 評価したものを、学部、大学全体で整理統合することでその客観性、妥当性を確保するようになっているが、学外者による検証をするようなシステムにはなっていない。

#### 点検 評価 長所と問題点

点検・評価結果を学部で最終的にまとめる前に、構成員各自によるチェック体制をとっていることは評価できる。しかし、毎年、専攻課程内だけで点検・評価を行っているとは評価の客観性が損なわれ、マンネリ化に陥る危険性がある。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

上の問題を避けるためには、できるだけ客観的な視点から点検できることが望ましい。そのために評価基準の標準化を図り、大学基準協会のような学外者に検証をしてもらうことが有効と考えられる。

#### (4)評価結果の公表

##### a.自己点検 評価結果の学内外への発信状況とその適切性

###### 現状の説明

自己点検・評価結果は、毎年、学部教授会の承認を得て学長宛に提出している。また、3年ごとに総括報告書『西南学院大学 現状と課題』が刊行され、学内外の閲覧に供しているのみならず、学外の関係省庁及び他大学にも送付することになっている。

#### 点検 評価 長所と問題点

自己点検・評価結果を学内外に向けて閲覧に供しているが、多くの分野に関して社会に向けて情報発信をすることの重要性、開かれた大学の在り方として評価できる。ただ、内容がこのように膨大、複雑になると、逆に利用価値がなくなってしまう恐れもある。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

点検・評価の結果を、専攻課程の運営発展のために具体化することが重要である。そのための一つの方向として、この点検・評価の内容及び結果を当該の全教員で共有し、日常的に点検・評価に関する意識を高揚する必要がある。

##### b.外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

###### 現状の説明

現時点では、外部評価を受けることはなされていない。

#### 点検 評価 長所と問題点 将来の改善 改革に向けての方策

外部評価は現在行われてはいないが、点検・評価の客観性を図り、改善の効果を上げるためには外部評価制度の導入が有用であると考えられる。

### B-3.外国語学科フランス語専攻

#### (1)自己点検 評価

##### a.自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

###### 現状の説明

フランス語専攻課程では、「西南学院大学点検・評価規程」に従い、毎年1回の点検・評価報告書を作成し、3年毎にそれらをまとめて点検・評価総括報告書『西南学院大学 現状と課題』として公表している。大学基準協会の基準による評価は2000年度報告書より実施され、2001年度については相互評

価を実施する。

#### 点検 評価 長所と問題点

本専攻では毎年、2、3名の点検 評価委員によって年次報告書が作成され、専攻課程協議会において吟味され、文学部教授会において公表されている。このシステムの有効性は、学外者の意見を反映させてよりよい専攻の運営を図ることが最終目的とはいえ、まずは年次報告書を作成することで本専攻の活動状況を概観し、1年間の具体的な運営状況を把握し、問題点を明確にし、反省及び改善を可能にすることである。項目別の点検 評価によってそれぞれの短期、長期的な改善のめどをつけることもできる。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

毎年作成される年次報告書をもとに、改善が急務である項目を中心に、日々個人メールで話し合われる提案等を、毎月開かれるフランス語専攻課程協議会で全体的に懇談事項として取り上げ、将来の展望を具体的に話し合うことを積極的に行っていかなければならない。今後は、学外者の意見も反映できるシステムへと制度を整えていかなければならないが、これは長期的展望をもって大学全体で取り組む必要がある。

### (2)自己点検 評価と改善 改革システムの連結

a.自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

#### 現状の説明

現在、フランス語専攻での自己点検 評価は、毎年6月末にまず2、3名の点検 評価委員によって報告書が作成、提出され、各専攻課程協議会、各学部教授会を経て、更に上位の委員会において公表されている。その内容についての意見交換は、本専攻課程協議会でなされるのみであり、その他の委員会では報告という形になっている。

#### 点検 評価 長所と問題点

自己点検 評価の結果を基礎にして、改善 改革を行うには、まず、各年度の懸案事項が専攻課程協議会各構成員に認識されなければならず、点検 評価委員を通して次年度に向けて努力すべき点が明確に伝達されなければならない。各構成員は、全学的に公表された他学部の点検 評価を検討し、更には、他大学の点検 評価や学外者の意見も参照してこれに取り組む必要がある。しかしながら、点検 評価の客観的な検証システムが確立していないので、現段階では、教員各自の努力に頼るしかない状況である。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

現在、自己点検 評価の作成には努力が払われていると思われるが、その結果をもとに、改善へ取り組むシステムは存在していない。今後可能な方策としては、他学部 学科の点検 評価委員と情報交換し、意見を出し合えるような学部横断的な改善 改革システムの確立が待たれるが、差し当たっては教員の個人的努力によって改善への道を模索するしかない。

### (3)自己点検 評価に対する学外者による検証

a.自己点検 評価結果の客観性 妥当性を確保するための措置の適切性

#### 現状の説明

自己点検 評価結果の客観性 妥当性を確保するための措置としては、専攻課程協議会各構成員に

報告書が提出され、それについての内部意見交換しか行われていない状況である。その他の委員会でも公表されるが、内容についてのフィードバックはなされていない。

#### 点検 評価 長所と問題点

上記(2)で記したように、全学的な点検・評価委員会の設置が必要であり相互に情報、意見交換の場が設けられることが望ましい。そのうえで学外者による検証を図ることが努力されるべきである。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

自己点検・評価の改善 改革システムについては、まだ十分に確立しているとはいえない。全学的な課題でもあるので、早急な取り組みが待たれる。

### (4)評価結果の公表

#### a.自己点検 評価結果の学内外への発信状況とその適切性

##### 現状の説明

上記(十七)―2(1)で述べたとおり 総括報告書「西南学院大学 現状と課題」を公開し、自己点検・評価結果は学内外に発信されている。

#### 点検 評価 長所と問題点

上記の総括報告書を作成し、学内外に公表していることは、本専攻にとって、その特徴や活動状況を多くの人にアピールし、将来的な展望のために様々な意見を取り入れる可能性を開いてくれる。しかし、現状としては、ただ公表しているという段階であり改善への積極的取り組みには至っていない。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

総括報告書の発信先を広げ、地域の日仏協同フランス語教育関係の諸機関にも配付し、改善のための情報交換のベースとして役立たせることも考えられる。

#### b.外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

##### 現状の説明

現在、外部評価は実施されていない。

#### 点検 評価 長所と問題点

自己点検・評価は、各担当部署による報告書の作成に終わらず、外部による評価も合せて行い、反省、改善への取り組みを積極的に実施して初めて意義があるものである。外部評価の適切な実施が待たれる。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

外部評価の実施にあたっては、自己点検・評価が、各担当部署の総合的・点検・評価であるので、個人的なレベルでの教育研究活動は尊重されるべきであり、各学部・学科への全体的な活動の評価であることが望まれる。

## B-4.児童教育学科

### (1)自己点検 評価

a.自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

現状の説明

現在、児童教育学科と社会福祉学科で、点検 評価委員各 1 名を選出して、学生主任、両学科主任及び教育福祉部長を加えた 6 名で教育福祉部点検 評価委員会を構成して、両学科の点検 評価を行っている。2000 年度までの児童教育学科の点検 評価は、学科主任、児童教育部長及び 5 部門からの点検 評価委員 5 名から構成された点検 評価委員会が行ってきた。そして、その点検 評価は、本学と同様に 1992 年度より始まり、毎年 1 回の点検 評価報告書を作成し、3 年ごとにまとめて点検 評価総括報告書『西南学院大学 現状と課題』として発行している。

点検 評価 長所と問題点

児童教育学科の点検 評価制度システムは、点検 評価委員により 毎年、教育活動、研究活動を中心に点検 評価が行われており 整備されたシステムと言える。しかしながら、点検 評価委員は、点検 評価報告書作成のために多くの時間を費やすことになり、新たな点検 評価制度システムの構築や導入、他大学での点検 評価制度システムの検討等に時間が取れないという問題点がある。

将来の改善 改革に向けての方策

自己点検 評価を定常的に行う制度システムとしては、上述の現行の制度システムでも有効である。更に今後、教員の自己点検 評価による自己モニタリングを活性化し、次に続く点検 評価ではその修正点や反省点を重点的に問題として取り上げ、児童教育学科、あるいは教育福祉部の改革につながる制度システムとなる必要があろう。

(2) 自己点検 評価と改善 改革システムの連結

a.自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

現状の説明

自己点検 評価は大きく分けて 2 種類あり 学科全体としての教育活動についての点検 評価 (各教員の講義等についての評価) と研究活動についての点検 評価 (教員各自の研究業績等についての評価) である。教育活動についての点検 評価の例として、基礎演習や 卒業論文中間発表会 等では、演習の最終回又はその発表会の最後に学生による評価を行っている。これらの評価に基づいて、次年度以降の演習内容、演習形態等に修正が加えられている。各教員の講義等についての評価では、一般教養等の講義での受講生数の変遷を調べて、学生の授業評価を間接的に検討している場合や、各講義後に学生に直接講義の感想を書かせる形態で学生からの評価を得る場合もある。研究活動についての点検 評価においては、各教員の研究業績は、学内では紀要 (学内の論集等) に発表されたものは、紀要の配付によりその業績を確認し評価することができる。しかし学外で発表された業績については、表題のみが『学術研究所所報』に 1 年に 1 回記載されるのみであり、業績内容の評価は難しい状況である。そこで、児童教育学科では、社会福祉学科と合わせて将来計画委員会を設置し、点検 評価で問題に上がった点や長年の懸案事項となっている問題点について、検討を重ねている。

点検 評価 長所と問題点

学科全体としての教育活動についての点検 評価は、それぞれ担当となった教員が評価を集計し、教授会に報告し議論され、次回への変更点として取り上げており有効に機能していると考えられる。一方、研究活動についての点検 評価において、教員各自の自己点検は、教員それぞれに任されており 統一した評価システムをとっていない。児童教育学科には多様な教科があり、また教授法も様々に異なっていることから、一律の評価システムが効果を発しないと考えられる。また、点検 評価を積極的に行わない



教員についてのチェック機能が働いていないという問題点がある。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

研究活動についての点検 評価 (教員各自の研究業績等についての評価)については、教員の専門が様々に異なっていることから、一律の評価システムを作成するのではなく教員を専門別にグループ化する等によって、それぞれの専門(又は近接領域)での一定の評価基準を作成することが可能であろう。更に、紀要以外の論文の抜き刷りの掲示や、出版物展示の場所を設定するといった対応も必要である。個人のレベルでは、各自のホームページ上等に業績を載せることによって、業績を公開することができる。また、研究成果の学内向けの発表会等を開催するといった方法を用いることによって、評価としての機能だけでなくお互いの知識を刺激しあうことも考えられる。

### (3) 自己点検 評価に対する学外者による検証

#### a. 自己点検 評価結果の客観性 妥当性を確保するための措置の適切性

##### 現状の説明

現在、自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置として、学外者による検証は行なわれていない。

##### 点検 評価 長所と問題点

学外者による検証を行っていない理由は、自己点検・評価に対する学外者による検証が客観的・妥当性を持って行われているかが、現時点では明らかでないという問題点を含んでいるからである。しかし、学外者による検証を行わないことは、一般的に学外者による評価が、短期的、顕在的に変化する部分について、重点的に行われやすい事実を考えるならば、それらの事実に従わずに長期的展望に立って、学科や学部自己点検・評価が行える長所を有するといえる。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

学外者からの検証を受ける場合には、どのような目的の下に検証を受けるかを明確にさせる必要がある。教育の向上が目的であるならば、基本的には教育を受けた学生の評価が望ましい。しかしながら、学生の評価によって改善点や改善されない点が生じたことの検証を、学生自身が行うことは困難である。この点を踏まえて、長期的な視野にたったの、点検 評価による改善点を検証するシステムの構築が重要である。また、研究業績の向上が目的であるならば、研究成果は専門外の学外者の検証は困難であるので、自己点検 評価結果の学外者による検証は更に困難である。既に研究成果や研究業績は、審査論文(レフェリー制度の下に発表された論文)、本の出版等という形態で評価されているので、これらの評価が、教員の研究活動を活発化し、教育活動を充実化させるうえで、重要な動機付けになっていると考えられる。

### (4) 評価結果の公表

#### a. 自己点検 評価結果の学内外への発信状況とその適切性

##### 現状の説明

児童教育学科の自己点検 評価結果は、総括報告書「西南学院大学 現状と課題」に記され、公開されて、関係の官公庁や国内の諸大学に送付している。

##### 点検 評価 長所と問題点

自己点検・評価結果を公開することは、発信内容への責任・自覚を持つうえでも重要であると考えられる。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

公刊した総括報告書「西南学院大学 現状と課題」に対する学外者の批判・助言等を、今後の児童教育学科の課題や方針等に活かすために、学外者にも分かりやすい自己点検 評価結果であることが必要であろう。

#### b.外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

##### 現状の説明 点検 評価 長所と問題点

現在、外部評価を行っていないので、点検 評価や長所と問題点については指摘できない。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

外部評価は、ともすれば短期的な効果や、目立つ評価に向けられることが多い。良い評価であれ、悪い評価であれ、評価そのもの持っている効果を良く検討したうえで、内外へ発信することが必要である。そのためには、外部評価を検討するシステムが必要であろう。

### B - 5 .国際文化学科

#### (1)自己点検 評価

##### a.自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

##### 現状の説明

本学科の点検 評価は、学科内の地域文化コースから選出された委員に部長・学科主任を加えた9名によって構成された点検 評価委員会によって行っている。本学科の点検 評価は、本学のそれと同様に1992年度から開始し、現在では9年を経過している。その間、毎年1回の点検 評価報告書を作成し、3年毎に3年度分をまとめて点検 評価総括報告書「西南学院大学 現状と課題」として公刊している。

##### 点検 評価 長所と問題点

毎年実施している点検 評価の対象は、まず本学科の理念・目的を改めて確認すると共に、本学科の教育課程、教員組織、研究活動、管理運営等の諸事項について詳細に検討を加えている。大学を取り巻く社会の状況は大きく変化し、社会の大学に対する要請は多様化し高度化している。したがって、本学科の現行の教育内容が的確にそれらに対応し得るものであるか否かについて定期的に検証することは、学科発展のためには不可欠のことである。本学科の理念・目的を改めて確認すると共に、絶えず発展を続ける学問研究の成果をいかに効果的に吸収・活用するかを考えると、この点検 評価の作業は重要な意義を持っている。ただし、点検 評価によって指摘された問題によっては、比較的短期間に解決が可能であることもあるが、場合によっては長期的な視野に立って努力を続けることが必要であることも少なくない。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムとしては、現行の方法でも十分に有効であるが、後述のような学外者による検証も必要であろう。

#### (2)自己点検 評価と改善 改革システムの連結

##### a.自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための制度システムの内

## 容とその活動上の有効性

### 現状の説明

本学科の自己点検・評価は、毎年詳細に行われているが、現状では、その結果が将来の発展に向けた改善・改革のために十分に活かされているとは言い難い点もある。もとより、例えば教育課程の「大綱化」に伴うカリキュラム改革及びその見直し等については、既に改善されて一定の成果を収めつつあるような事項もあるが、他方では学科の将来の展望を開くための人事計画の作成・実現等のように、大学の直面する諸事情とも絡んで、その早急な解決が極めて困難な事項もある。

### 点検・評価 長所と問題点

定期的に自己を点検し見つめ直すことは、将来の発展にとって極めて重要なことである。しかし、これを効果的に行うためには、点検・評価自体が形式的にならないように留意すべきである。そのためには、点検・評価を組織的に日常的に改善・改革に具体化するシステムが必要であるが、学科としての継続的な取り組みは必ずしも積極的ではなかった。

### 将来の改善・改革に向けての方策

自己点検・評価の結果を十分に活かすためには、その内容を検討して、比較的の短期間に実現できるものと長い時間を要するものとを峻別し、計画的にそれらの実現に向けて努力することが必要であろう。本学科は、各コースから選出した委員と部長、学科主任とでカリキュラム検討委員会を設置しており、この委員会が学科改革の中心的な機能を果たすように努める必要がある。コース所属者間、また語学やキリスト教学等の担当者間での協議を、一層緊密化することも必要であろう。

## (3)自己点検・評価に対する学外者による検証

### a.自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性

#### 現状の説明

自己点検・評価に対する学外者による検証は、現在は実施していない。

### 点検・評価 長所と問題点

学外者による検証は、必要であろう。ただしその場合には、点検・評価の検証を担当する学外者自身の立場・資格等についても、大学における学問研究の自由を確保するという観点から、十分な配慮がなされなければならないだろう。

### 将来の改善・改革に向けての方策

本学において現に自己点検・評価を実施し、その結果を定期的に公開している以上、いずれ学外者による検証を受けるためのシステムを設定して、それによって点検・評価の成果をより効果あるものにすべきであろう。

## (4)評価結果の公表

### a.自己点検・評価結果の学内外への発信状況とその適切性

#### 現状の説明

自己点検・評価の結果は、前述のように、3年に1度『西南学院大学 現状と課題』として総括報告書を公開し、関係の官公庁や国内の諸大学に送付している。

### 点検・評価 長所と問題点

自己点検・評価の結果を学外に公表することは、大学の公共性・開かれた大学という原則からも当然

のことである。既に本学においては、上記のように『西南学院大学 現状と課題』を公開している。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

総括報告書『西南学院大学 現状と課題』は、現行より更に広範に、例えば一般の企業や高等学校等へも送付すれば、本学卒業生の就職や本学入学を希望する受験生の大学選択等に際して、重要な参考資料として役立つものと考えられる。

#### b. 外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

##### 現状の説明

外部評価は、現在は実施していない。

##### 点検 評価 長所と問題点

自己点検・評価を更に効果的にするためにも、外部評価を制度的に実施し、その結果を学外にも公開することを検討する必要がある。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

外部評価を実施する以上、その結果については最終的には学内外に公表すべきであろう。ただし、その場合においても、当然のことながら、個人のプライバシーの保護及び学問研究評価における客観性・公平性を確保することが不可欠であり、十分に慎重な配慮をもって行うべきである。

### B - 6 . 社会福祉学科

開設年度の 2001 年度においては、本学科では、学科主任と社会福祉学科協議会によって選出された委員（1名）によって自己点検 評価委員会を構成し暫定的な作業にあたった。なお、今回の自己点検 評価については、社会福祉学科設置準備委員会が協力をした。本格的な点検 評価活動は、来年度以降実施の予定であるが、その際には、自己点検 評価委員の構成（人数等）についても再考して、自己点検 評価活動の恒常化を図るつもりである。

### C . 商学部

#### (1) 自己点検 評価

##### a. 自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

##### 現状の説明

学部毎の点検 評価は、近年は毎年行われてきたので、自己点検 評価を行うための制度システムは形式的には機能してきたと言えよう。自己点検 評価項目の内容も、2000 年度報告書からは大学基準協会のフォーマットを適用した詳しい点検 評価が行われることになった。そしてこの詳しい点検 評価の報告書は、近く刊行され公開されることになっている。今回とも自己点検 評価を行うための制度システムの有効性を維持する努力を継続したい。

##### 点検 評価

自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムは、一応整備されていると言えよう。しかし、そのシステムが有効に機能しているかどうかという点になれば、様々な現実的制約があり、必ずしも有効に利

用されていない側面も見られる。点検 評価をより厳格に進めるとともに、この改革に結びつく提案を含む点検 評価の作成が今後の課題として残されている。

#### 長所と問題点

商学部が近年行ってきた点検 評価は、教育研究活動の問題点を明らかにし、その改善を促進するためのものであるが、持続的になされてきた点はシステム的な長所として評価されよう。しかし、前述のように、その点検 評価が商学部の改革につながる方向でなされてきたかどうかという点、必ずしも十分な配慮がなされてこなかった。この点が、この報告書を含めて今後の課題であろう。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

今回の点検 評価報告書は、2001年4月1日から2002年3月31日までの期間を対象としたものである。点検 評価年次報告書、3年に1度の総括点検 評価報告書『西南学院大学 現状と課題』の作成が行われることになっている。自己点検 評価を恒常的に行うための制度システム作りを、今後とも持続していくことが望ましく、それと共に指摘された問題点の着実な改善が進められることが望ましい。

### (2)自己点検 評価と改善 改革システムの連結

a.自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

#### 現状の説明

教員の教育活動に関しては、年間講義計画、講義概要等を明記したシラバス、すなわち『商学部講義要綱』を毎年作成し、学生に配布している。また、研究活動については、毎年度、商学部教員の研究業績が『学術研究所報』に一括して掲載される。更に学術研究所のホームページには、各教員の学歴、担当科目、過去の研究業績等が掲載され、学外者にも閲覧可能になっている。このように、ある種の個人の研究 教育情報公開制度を取ることで、年度を重ねる毎に、より充実した内容となるよう各教員に努力を促すシステムが一定程度できあがっている。

#### 点検 評価

上述のシラバスは年々その掲載内容が充実し、内容の濃いものになっている。そのため、学生が講義を履修する際の重要な参照物として大きな役割を果たしている。『学術研究所報』での研究業績の管理、並びにインターネットによる研究業績の公開によって、各教員の研究活動の状況が明らかにされている点は大いに評価できる。また、各教員の研究業績も着実に増えており、このような情報公開制度は各教員の研究教育活動に対する自覚を促すうえで有効なものとなっている。

#### 長所と問題点

個人の研究業績や教育内容が一定程度公開されることは、教員にとって良い刺激になっている。ただし、学生による授業評価あるいは第三者による評価システムはいまだ制度化されておらず、評価結果を常時フィードバックし、改善改革に向けた取り組みに直結するための施策としては不十分な面もある。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

教員の責務の一つは教育 研究活動の向上と改善であり、今後もシラバス作成の意義を再度確認しながら、更なるフィードバックのための適切な措置を検討する必要がある。また、学生による授業評価の制度的確立に向けた検討等、自己評価の推進とそれを正当に評価し、その結果を次年度に反映させるための措置を考えていかなければならない。特に、対前年度と比較してどのような改善改革がなされたかを定量的に明確にする制度システムの設計が必要かもしれない。

### (3)自己点検・評価に対する学外者による検証

#### a.自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性

##### 現状の説明

商学部では、学部長、学科主任を中心に、これまで定期的に『商学部点検・評価報告書』を作成してきた。学部レベルでの自己点検に加えて、各専任教員レベルでは『商学部講義要綱』において担当科目の講義計画を毎年作成し、また『学術研究所報』に毎年度の研究業績が掲載される等、自己点検・評価が進められている。ただし、学外者による、いわゆる第三者評価はいまだ実施されていない。

##### 点検・評価

大学と大学評価をめぐる急速な動きを踏まえて、ほぼ毎年度、上記のような学部レベル・各専任教員レベルでの自己点検が行われてきており、その内容も年々充実してきている点は評価できる。研究業績についてはインターネットを通じて広く外部に公開されており、教員が研究活動を行ううえでの刺激にもなっている。

##### 長所と問題点

自己点検・評価を各年度に行うことにより、各教員がそれを自覚のうえ、教育・研究内容の一層の発展を目指している点は注目し得る。しかしながら、第三者機関による事後評価の制度的施策は依然として存在していないという意味では、評価の客観性の観点から見て若干の疑問符が付される。

##### 将来の改善・改革に向けての方策

自己点検・評価に関して作成された文書は、いまだ、外部のすべての人に閲覧可能であるとは言えない。また、学生による授業評価制度や外部の第三者機関による学部評価についても、導入の是非を含めて早急に検討する必要がある。

### (4)評価結果の公表

#### a.自己点検・評価結果の学内外への発信状況とその適切性

##### 現状の説明

本学部の自己点検・評価活動は、全学的な取り組みと深く連携しながら、1992年度以来、毎年行われている。学部教員全体の意識の共有を基盤にして、学部長・両学科主任から成る執行部を中心とした委員会を中心に活動が行われ、毎年報告書が作成される。この報告書は、全学部・部局のものが全学的に集約され、学内的に閲覧可能な形で保管される。また、この年次報告書の成果を基盤にして、これまで1996年、1999年に中期的な総括報告書である『西南学院大学 現状と課題』が印刷物の形で刊行されており、教職員が閲覧可能である。

##### 点検・評価

積極的な情報発信活動の前提となるのは、冷静かつ客観的な点検・評価活動とその成果としての報告書である。各学部の自己点検・評価結果は年次報告書として保管され、教職員が閲覧可能な体制が採られている。つまり、原理的には学内外への情報発信については肯定的な体制となっているものと評価できる。また、同じく冊子の形式になった『西南学院大学 現状と課題』(1996年・1999年)は印刷物として刊行されている点で、より閲覧の便に供しており、情報発信の基礎をなすものと言える。その点では、本学部での点検・評価活動に関する情報発信については、基本的な方向に誤りはないと言える。

#### 長所と問題点

教職員に関する限り 報告書の閲覧に基本的に制度的制約がないことは情報発信の面で間違ったことではない。しかし、以上のような在り方を越えて、学部として積極的に情報発信に取り組んでいるとは言いにくい現状であることは認めざるを得ない。少なくとも 学部全体で当該活動に関する意識が十分とは言いにくい面がある。また、学生や保護者に対して、点検 評価活動の結果報告が十分になされているとは言えない現状には問題がある。更に、教職員 学生 保護者といった学内諸関係者以外の、マスコミをはじめとした学外に対する情報発信についての取り組みが進んでいるとはいえない。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

まず、点検・評価活動の成果を日常の教育課程の中で具体化していくべき教職員に対して、当該活動に関する意識を高めるよう呼びかける努力が必要である。そして、活動を一部の担当教員のものとして任せるのではなく、報告内容を共有していくことがまず第一歩である。また、学内外に対しては必ずしも報告書そのものの配布にこだわることなく、ダイジェスト版も含めて内容を具体的でわかりやすい形で発信し、その本旨を広く伝えていく必要がある。そのためには、印刷物・ウェブ等のメディアを効果的に使うことが望ましい。

#### b.外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

##### 現状の説明

本学部の自己点検 評価活動は、全学的な当該活動の一環として、1992 年度以来毎年行われている。学部全体の当該活動に関する意識の共有を土台に、執行部を中心としたメンバーによって行われ、毎年報告書が作成される。この報告書は、全学部 部局のものが全学的に集約され、教職員が閲覧可能な形で文書課で保管される。また、この年次報告書の成果を基盤にして、これまで1996年と1999年の2回に、中期的な総括報告書である『西南学院大学 現状と課題』が発行されている。これらの報告書に集約される点検 評価活動について、外部からの問い合わせがあれば、可能な限りで回答される。

##### 点検 評価

学部の自己点検 評価結果は年次報告書として保管され、教職員が閲覧可能な体制が採られている。つまり 原理的には学内発信が可能な形となっており 基本的には学内外への情報発信の方向性に沿った体制となっているものと評価できる。また、同じく 冊子の形式になった『西南学院大学 現状と課題』(1996年・1999年)は印刷物として刊行されており、より閲覧しやすくなっている。これらは、外部評価を行う際の基礎的な資料と位置づけることが可能なものである。こういったことから、本学部の点検 評価活動は外部評価に適合的な現状であると言える。

#### 長所と問題点

報告書が印刷物の形で提供可能になっていることや、外部からの問い合わせに対して回答する用意があること自体は、原理的に本学部が外部評価に向けた方向に沿った姿勢をとっているものと言える。ただし、これは前提条件が準備されているというものであって、外部評価そのものが行われているかという問題とは別で、その点は本学部での取り組みは不十分なものである。ただ、本学部の教育課程の在り方が一般教養科目や語学科目のように他学科と密接にからんでいることからいって、外部評価を受けようとする際は、より全学的な連携にも取り組む必要があるだろう。

#### 将来の改善 改革に向けての方策

過去約10年間かけて、精力的かつ誠実に取り組んできた点検 評価活動の成果をより積極的に活用するためにも、外部評価を受けることが大切なのは言うまでもない。外部の大学関係者をはじめとした有

識者に依頼して、本学部の点検・評価活動の内容に関する報告を行い、それに対する忌憚のない意見等を聴取する必要がある。そのような外部評価も含めて点検・評価活動の報告内容を学部の全教員間で積極的な情報共有及び討論を行い、教育課程の在り方に効果的に反映させていくことが望ましい。

#### D. 経済学部

##### (1) 自己点検・評価

###### a. 自己点検・評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

###### 現状の説明

経済学部では、ほぼ毎年自己点検・評価報告書を作成している。その際、例年、学部の専任教員から1人選ばれ学生生活一般を管轄する学生主任が、その草稿を作成することになっているが、これが当人にとって過大な負担になっている。このままでは、恒常的に自己点検・評価を行っていくことはできない。

###### 点検・評価 長所と問題点

点検・評価報告書の草稿作成者にとって、この作業が過大な負担になっている現状を考慮して、報告書の形式、内容についても再考が必要である。

###### 将来の改善・改革に向けての方策

大学・学部の研究・教育の現状を示す資料と自由論述方式の簡潔な自己点検・評価報告書との組み合わせが、恒常的に点検を実施していくための方策といえる。そして、点検・評価の主役はあくまで外部者であることを明確にする必要がある。

##### (2) 自己点検・評価と改善・改革システムの連結

###### a. 自己点検・評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善・改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

###### 現状の説明

自己点検・評価が将来の改善・改革につながるという理想的な姿にはなっていない。報告書があまりにも膨大で、それを読んだだけではどこに火急の問題があるのかが理解できないからである。

###### 点検・評価 長所と問題点 将来の改善・改革に向けての方策

我々の意識の流れは逆であって、何か火急の問題がある場合に、その解決の方途を探るために現状を点検してみるのである。その意味で、形式的で網羅的な自己点検・評価はあまり意味がない。

##### (3) 自己点検・評価に対する学外者による検証

###### a. 自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性

###### 現状の説明

経済学部では、外部者による点検・評価結果の検証は行なわれていない。

###### 点検・評価 長所と問題点

外部者の評価こそ点検・評価の最終目的といえる点に照らして、現状は全く不満足なものである。ぜひとも外部者が最終評価を下すような点検・評価システムを構築する必要がある。そのためには、外部者に評価を仰ぐべき自己点検・評価報告書は簡潔である必要がある。



将来の改善 改革に向けての方策

外部者に自己評価の「検証」をしてもらうのではなく、外部者に評価そのものをしてもらうことが必要である。外部評価者の人選も含めて、具体的に考え始める必要がある。

#### (4)評価結果の公表

##### a.自己点検 評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明

毎年、内部資料として報告書を作成したうえで、3年に一度は公表を前提とした報告書を作成するという制度となっている。公表の形式は、印刷物として配布するというものである。

点検 評価 長所と問題点 将来の改善 改革に向けての方策

点検・評価報告書は、公表されて初めて意味を持つ。公表されるからには、多くの人に読んでもらう表現と分量の工夫も必要である。また、インターネット上で簡単に参照できるようにすべきである。

##### b.外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明 点検 評価 長所と問題点 将来の改善 改革に向けての方策

現在、外部評価は行っていないので、この項は該当しない。

## E.法学部

### (1)自己点検 評価

#### a.自己点検 評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

現状の説明

法学部では、「西南学院大学点検・評価規程」に従い、学部点検 評価委員会を設置して、点検・評価を行っている。学部点検・評価委員会は、学部長が委員長となり、委員長を含めて4～5名の委員から構成される。委員は教授会で選任されるが、これまでは、学部長の推薦を教授会が承認する形で選任が行われてきた。点検 評価の結果は、1年毎に1回、4月から翌年3月までの状況について行った年次報告書を作成し、内容について教授会の承認を得たうえで学長に提出している。

点検 評価

法学部の自己点検・評価のためのシステムは、内容及び活動共に特に大きな問題はなく、適切なものと評価できる。

長所と問題点

自己点検・評価委員としての作業は、委員に選任された教員にとってかなり重い負担となり、また、内容について委員以外の教員から意見を求めたり、協議をする時間的余裕がなかなかとれないのが現状である。

将来の改善 改革に向けての方策

自己点検・評価の内容について、広く教員相互での意見を交換する機会をより多く設けるようにしたい。

## (2)自己点検 評価と改善 改革システムの連結

a.自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善 改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

### 現状の説明

西南学院大学点検 評価規程」により、学長は、点検 評価の結果を踏まえて、教育研究活動等の改善に努めるように関係部署に指示するとともに、理事会に報告し、大学の中 長期計画に反映させるように努めるものとされている。また、全学点検 評価委員会は、点検 評価の結果を踏まえて、点検 評価項目、実施体制、実施方法、点検 評価結果の活用等について定期的に見直し、改善に努めるべきものとされている。法学部でも、この制度にしたがって点検 評価の内容を生かすことになる。法学部独自に点検 評価結果を、改善 改革につなげるための制度は特に存在しない。対応が必要な事項については、教員の提案に基づいて教授会の議題として取り上げ、検討してきた。

### 点検 評価

学部独自の制度システムは特に持っていないが、必要に応じて教授会等を通じて対応がなされている。また、点検 評価委員には学部の執行部 (学部長、学科主任、学生主任) が選任されるのが通常であるので、点検 評価の結果を学部の運営に生かしやすい状況にある。

### 長所と問題点

上記 で述べたように、事実上点検 評価の結果を学部運営に生かしやすい状況にあり、また、実際にも、必要な対応は執行部を中心に取られてきた。しかし、それがシステム化されていないために、対応に偏りや欠陥が生じるおそれがある。

### 将来の改善 改革に向けての方策

執行部を中心に各教員が点検 評価の結果を生かすように、より留意すると共に、報告書の作成に際しては、前回の報告書で指摘された問題点についてどのような対応がなされ、どの程度改善されたのかについての検証を重視するようにしたい。

## (3)自己点検 評価に対する学外者による検証

a.自己点検 評価結果の客観性 妥当性を確保するための措置の適切性

学外者による検証は、直接的な形ではこれまでは行われてこなかった。以下の(4)で述べる公表を通じて、間接的に点検 評価の客観性 妥当性が図られていたととどまる。法学部としては、自己点検 評価委員会で年次報告書の原案を作成し、それを教授会で審議して、できるだけ客観性 妥当性を確保するように努めている。

## (4)評価結果の公表

a.自己点検 評価結果の学内外への発信状況とその適切性

### 現状の説明

西南学院大学点検 評価規程」により、法学部関係の自己点検 評価結果については、全学の「総括報告書」の中に組み入れられ、学長によって学内外に公表されている。法学部独自に公表する制度はなく実際にも行われていない。

### 点検 評価 長所と問題点 将来の改善 改革に向けての方策

総括報告書」の公表に関しては、(十七)- 1「大学の自己点検 評価」の箇所に委ねる。法学部独自の公表については、特にそれを設ける必要はなく現状には特に問題はないと判断される。

b.外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明 点検 評価 長所と問題点 将来の改善 改革に向けての方策

上記のように、学部として独自に外部評価を受けることはなされておらず、したがって、その評価結果を学内外に発信することもなされていない。